



日本キリスト教団
三軒茶屋教会

三軒茶屋 教会通り

〒154-0024
第10号 2000年12月発行 東京都世田谷区三軒茶屋1-31-5
TEL/FAX: (03) 3418-4933
編集/発行: 広報部

福音を新しい世紀へ



牧師 陣内厚生

世紀の代わる節目に立って、私たちの周囲を見渡すとき、二十一世紀の輝かしい兆しを見出すことができるとか、恐らく、多くの人がびとが、それとは反対の時代状況を知るに違いありません。すなわち、「現代」を最もふさわしい言葉で表現すれば、やはり依然として「不安と危機の時代」としか言いようがないのです。

二〇世紀には、人類があらゆる分野において進歩をとげ、わがもの顔でそれを謳歌してきました。然るに科学技術の長足の進歩は、例えば、大国の覇権主義の下で、二つの大戦による大量殺りくに寄与したり、また利潤追求の下で、産業の破綻と環境破壊をもたらしています。長かった冷戦構造が終わっても、核保有国は依然として人類の命運を握っています。さらに、経済至上主義は、人びとの心を蝕んできました。精神や倫理は荒廃し、不信任や孤独感が増しに募っています。現代人の病理は、このまま私たちを自滅に陥れるほかはないのでしょうか。

さて、キリストの教会は、このような「不安と危機の時代」に今も生き続けています。この世で、この時代の中で生き続けるかぎり、教会はどのような意義をもち、どのような責任を果たそうとするのかは、重大な課題であります。かつて、エーリヒ・フロムが著書「自由からの逃走」の中で、「一九世紀の問題は『神は死んだ』』ということであつたが、二〇世紀の問題は『人間が死んだ』』ということである」と述べました。私は、「二十一世紀には教会が死んだ」とならないように、教会自らが問われる課題にしっかりと答えていかねばならないと思います。

「教会とは何か。何のためにあるか」と問われます。「それはイエス・キリストにおける神と人間との交わりの回復を証しする、福音によるキリスト者の共同体である」と答えることができます。

極度に発達した技術文明の中に溶しながら、偶像崇拜的（または無神論的）、自己中心的生き方から脱しきれない二十一世紀の人びとが窺えま

す。自滅の様相の色濃い時代に、教会は、福音をきつちりと提示し、非福音的生き方を転換させる手段を尽くさねばならないでしょう。今までのこの世的な価値観が、個人を駄目にし、家庭を破滅させ、社会や国を危うくしているのであれば、それを変革して新しい価値観を打ちたてなければなりません。この価値革命の担い手こそが、福音を掲げるキリストの教会であると信じます。十字架と復活の福音には、これをなすところから、まさに世紀の代わり目、「終わりの時」は「始まりの時」となるのです。

マルコ福音書一・一五「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」とイエスは言われました。二十一世紀という時代は、過去の愚行を繰り返すのではなく、福音の人間像、世界観に基づく共生と共存の時代を送るべきでしょう。福音がこの世に喜びと希望をもたらすことを確信し、新たな世紀への出立を期していきたいものです。